

### キウイフルーツの摘心方法について

姫野周二・浜地文雄・森田 彰(福岡県農業総合試験場)

Shōji HIMENO, Fumio HAMACHI and Akira MORITA : Topping of KIWI FRUIT

キウイフルーツは、樹勢を強く保って栽培するため、枝梢は生育期の長期間にわたって伸長し枝葉が増加する。また、枝條は棚線や枝に巻き付き、冬季のせん定作業時にこれを取り除くのに多くの労力を必要とする。

枝葉の過繁茂を防止し、適正な葉密度を維持するとともに枝條の巻き付きを防いで充実した結果母枝を確保するためには新梢の伸長を抑制する必要があり、この方法の一つとして摘心について検討を行った。

#### 1. 実験方法

1) 実験 I 強勢な新梢の摘心：3年生のHaywardの主幹部から発生した強勢な新梢について、A区は新梢先端の未展葉部を、B区は葉身の縦横径が成葉の1/2(約5cm)の葉の着生部より先を5月12日に摘除し、C区は無処理のもとと比較した。

2) 実験 II 中庸な新梢の摘心：3年生のHayward, Abbot およびBruno の中庸な新梢に対し、8月5日A区は無展葉部を、B区は葉身の縦横径が約5cmの幼葉の着生部より先の部分を、C区は成葉と判断される最も新しい葉より先の部分を摘除して、副梢の発生について調査した。

#### 2. 実験結果および考察

1) 実験 I 処理時の先端から1,3,5,7番目の葉の処理後の展開は葉の肥大など、処理による影響はみられなかった。処理後の枝の長さは、5cm葉部摘心区では全く

変化せず、節間の伸びは、葉身径約5cmの部位ではすでに止っていると思われる。未展葉部摘心区では2週間後までは伸長がみられ、約2倍になった。無処理区では6週間後には3m以上になった。

処理枝の基部径は、無処理区>>未展葉部摘心区>5cm葉部摘心区となり、6週間後には無処理区は他区に比べ著しく肥大した。

副梢の発生は、無処理区では6週間後まで全く認められなかった。摘心した区では処理後2週間目から再発芽がみられ、6週間後の状態は、5cm葉部摘心区では83%の枝で副梢の発生がみられたが、未展葉部摘心区では約30%にとどまった。

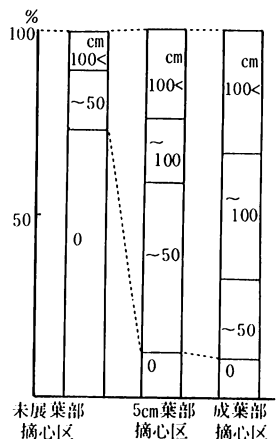
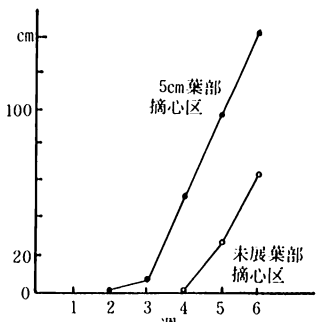
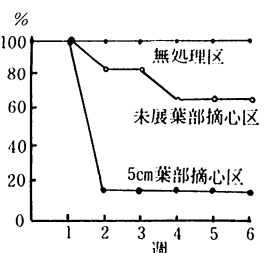
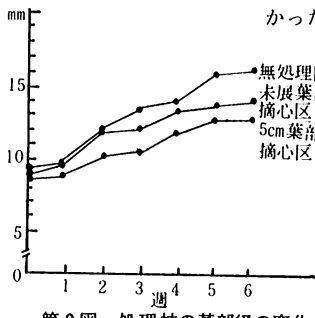
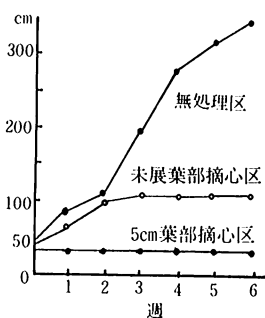
処理6週間後の発生した副梢の平均長は、5cm葉部摘心区では140cm、未展葉部摘心区では60cmとなり、発生本数・長さとも未展葉部摘心区において新梢の抑制効果が認められた。

2) 実験 II 処理後2週間目では、3品種とも未展葉部摘心区での副梢の発生は全くみられなかったが、5cm葉部摘心区では80%の枝で再発芽が認められた。

落葉期における副梢発生の状態は、未展葉部摘心区では20%の枝で認められたにすぎなかったが、5cm葉部摘心区および成葉部摘心区では約90%と高率で副梢が認められ、その副梢も未展葉部摘心区に比べて長いものが多かった。

これらのことから、新梢の過剰な伸長を抑制し、枝葉の過繁茂を防止するには、新梢先端の未展葉部を摘心するのが有効であり、逆に主枝

延長枝等で伸長が衰えて巻き付きを始めたものに対しては、成葉部で切り返すことによって速やかにかつ強勢な副梢が得られる。



第5図 摘心(8月5日)処理が落葉期における再伸長枝の長さにか及ぼす影響 (Hay.,Abb.,Bru.)